

a 学校教育目標	夢と高い志を抱き、自ら学び、心豊かに、たくましく生きる児童の育成	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】(自校の使命)〇志を抱き、その実現に向けて考え、行動できる未来の創り手の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 〇児童の確かな学力、豊かな心、健やかな体をバランスよく育成する学校 〇自己研鑽に励み、子供に寄り添い、チームワークを大切にする教職員 〇保護者・地域に信頼される学校 【育成をめざす資質・能力】 〇課題発見・解決能力 〇コミュニケーション能力 〇主体性 〇自己理解
----------	----------------------------------	----------------------	--

評価計画				自己評価					改善方針		I 学校関係者評価			
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	7月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	改善方針	評価			
					h 達成値	h 達成値					イ	ロ	ハ	
確かな学力 学び方の獲得と確かな学力の向上を図る。	(1) 基礎基本の定着、及び主体的・対話的で深い学びの実現を図る。 〇学習分析(学力定着確認・学習環境把握)結果をもとに、具体的な対応策を明確にし、児童の学力向上を図る。	◎教職員の授業力向上(ファシリテーターとしての教師の役割) ・児童の「主体的な学び」を実現する授業づくり(日常生活との関わりや必要感のある教材、めあて・まとめ・評価の一体化、目標達成に向かう発問(本質的な問いの設定と問いの解決)、ICTの効果的な活用) ・「学び方の獲得」のための手立ての工夫	・毎月の「ファシリテーター力アンケート」において、目標値(平均70%)を達成した教職員の割合	80	86	87	108%	A	・毎月の「ファシリテーター力アンケート」において、目標値(平均70%)を達成した教職員の割合は87%で目標値を上回った。毎月の「ファシリテーター力」自己評価の集計・考察から次の取組へとPDCAサイクルで取り組みを続けてきた成果が表れていると考える。毎月の自己評価の振り返りでは、授業改善の具体的な内容について記述する等、教職員の意識が高まってきている。	・引き続き毎月の「ファシリテーター力」自己評価を集計し考察を行い、PDCAサイクルで取り組みを積み重ねていく。毎月、全体で重点的に取り組む項目を決め、意識して授業改善を図る。	4			〇少人数を生かして丁寧な取組をしている。 〇子ども一人一人の良さを引き出している。 〇意欲やきめ細やかな取組が具体的な説明で伝わった。 〇学力向上(特に算数)に期待する。 〇基本と大切に、復習を。 〇児童数が少ない学校の良さを生かして、個性の指導をこれからも頑張っていたきたい。 〇教職員の意識も高まり、A評価達成に、毎月全体で重点的に取り組む項目を決め、意識して授業改善を図るなど、熱心な取組で成果が表れ、信頼される魅力的な学校に変化していると感じた。 〇先生方の取組や丁寧な指導の成果で、どの学年も子ども主導の授業内容で工夫され、自身に溢れ取り組む子ども姿に変化と成長を感じた。 〇5・6年生では、複式学級のメリット体験を力に変えた子ども達の変化を強くたくましく感じた。
			・単元末テスト目標平均点(低学年90点、中学年85点、高学年80点)以上の児童の割合	70	国語(66)算数(49)	国語(72)算数(63)	国語(102%)算数(90%)	A B	・全校の単元末テストの目標平均点に達成した児童の割合は、国語科72%、算数科63%で、国語科は目標を達成したが、算数科は目標値を下回った。2学期から、ドリルタイムでのアシストシートを活用した前学年の復習や本時の学習の適応問題の定着率80%を目指した授業づくりに取り組んだことで、1学期と比べると国語科は6%、算数科は14%上がっている。	・引き続き、ドリルタイムでは、漢字小テスト、計算を行い、基礎基本の定着を図る。また、NRTのアシストシートを活用し、今の学年の復習及び学力の定着を図る。また、算数科の授業では、本時の学習の適応問題の定着率が80%以上となるよう、授業改善を続ける。	4			
	◎各種学力調査の活用と学習環境改善による学力の向上 ・学級、学習集団づくり ・学力調査、学習環境の結果分析をもとにした取組の実践	・標準学力調査(12月実施) 全国平均を上回る児童の割合	70		国語(67)算数(69)	国語(95%)算数(98%)	B B	・全国平均を上回った児童は、国語科67%、算数科69%であった。国語科は3%、算数科は1%目標に届かなかった。国語科は、片仮名や漢字、慣用句など、算数科は、計算や単位換算などの問題に課題が見られた。どちらの教科も基礎基本の定着に課題がある。	・NRT、全国学力状況調査に向けて計画し、全教職員で取り組みを進めている。 ・NRTの問題から、児童につけたい力を確認し、児童が力をつけるため授業改善を図る。 ・問題を読んだり、解いたりすることのスピードを上げることに日々取り組んでいく。	4				
	(2) 探究的学びの実現を図る。	◎「総合的な学習の時間」「生活科」における探究的学びの実現	・児童が主体的・協働的に探究することができる単元開発及び単元構成の工夫、効果的なカリキュラム・マネジメントを実施した教職員の割合 ・「地域や社会をよりよくするために何をすべきかを考えている」児童の割合	100 66	100 93	100 93	100% 140%	A A	・1学期に続き、2学期の目標を達成した。校内研修で進捗状況の確認や今後の取組について全体で共有したことを各担任が意識して取り組んだことが肯定的評価につながったと考える。 ・「地域や社会をよりよくするために何をすべきかを考えている」児童の割合は97%で目標値を上回った。特に「地域に貢献したいと思っている」の項目では、どの学年も肯定的評価が90%以上であった。	・今後も道徳科を要したカリキュラム・マネジメントの学習プログラムを、生活科や総合的な学習の時間を中心に作成し、探究的な学びの実現を目指す。 ・来年度に向けて、生活科や総合的な学習の時間を中心に地域につて考えたり、関わったりする活動を仕組み、児童が地域や社会をよりよくするために何ができるか考えられる取組を考えていく。	4			
豊かな心と元気な体 健やかな体と豊かな人間性を培う。	(1) 基本的生活習慣の確立を図る。	◎挨拶・清掃・ベル着・靴揃え、机の整理・整頓の徹底 ◎生活習慣の改善を図る取組の実施	・学期に1回家庭での生活改善週間の取り組みを行う。 ・学期に1回アンケート調査を行い、肯定的評価をする児童の割合	100	100	100	100	A	・1学期に引き続き、2学期のアンケートの取組を行うことができた。各学級で、担任が毎日チェックをしたり、声かけを行ったこと、自分たちの生活習慣を見直すことができていた。	・定期的に行うことで、意識して行っている児童が増えている。生活改善週間に関わらず、日頃から意識して行えるように、担任から声をかけるなどの取り組みを継続的に取り組んでいく。	4			
			◎「考え、議論する道徳」の実践及び道徳科を要したカリキュラム・マネジメントの充実による学びを行動につなげる道徳教育の「継続と深化」	・道徳児童アンケートの重点項目(4項目)において、肯定的に回答した児童の割合 ・道徳科学習プログラムを作成し、実践した教職員の割合	85 100	86.3 100	85 100	100% 100%	A A	・12月の児童の道徳アンケート結果では、重点4項目の肯定的評価の平均は85.4%だった。特に9「将来の夢や目標に向かって努力している」93.7%、10「将来の夢や目標に向かって努力している」95.8%と高かった。 ・道徳科を中核としたカリキュラム・マネジメントの取組は100%だった。	・今後も道徳科の授業を要として、児童の自己肯定感を高める取り組みを進めいくとともに、「考え、議論する」授業への改善を図っていく。 ・今後も道徳科の学習と他教科、他領域を「つなぐ」意識で取組を続けていく。	4		〇子ども達の挨拶が気持ちよく、表情も明るく、指導の成果がうかがえる。 〇みんな仲良く、笑顔の子ども達でよい。 〇相手を思いやり、親切にする子ども達の姿に、道徳教育が生かされていると感じる。 〇きちんと「ありがとう。」を言うてくれる。
	(2) 健康の保持・増進と体力の向上を図る。	◎体力づくりと食育の推進	・体を動かすことが楽しいと感じる児童の割合 ・食べ物や食事を作る人に感謝しながら食べる児童の割合	80 90	90.7 97.7	89.6 95.8	112.0 106.4	A A	・キャリアログの記述を見ると、「地域の人に自分から進んであいさつすることができた。」「無言掃除をし、しゃべっている友だちがいいたら、注意をした。」など、自分の頑張ったことを書くことができていた。 ・体を動かすことが楽しいと感じる児童の割合は89.6%であった。中間よりわずかに下がったが、寒・暑期間であるので調整の範囲内であると考え、全体的には高い傾向にある。体育の授業や体育朝会、児童会での呼びかけなど、運動量確保し、楽しい活動できるように取り組んでいる結果と考える。 ・給食を美味しく食べる児童の割合は95.8%であった。中間よりも下がっているが、目標を上回って達成することができている。昨年度のわかみ成果に加え、各学級で「残さず食べる」教材を活用し、「食べるに感謝する」指導を継続的に行っている結果と考える。感謝して食べている児童は多いものの、残棄がやはり多い実態がある。	・今後も約1割の否定的立場の児童の様子を注意深く観察したり、聞きとりを行ったりしながら、とりくみを継続していく。また、楽しく活動できるような個々の体力に合わせた指導や運動量の確保等、「体を動かして楽しい。」「できた」といった充実感を味わせていく。 ・否定的な回答している児童は残棄も多く、固定している傾向にあるので、食育指導等と合わせながら、個別にじっくり対応していく必要がある。また、給食週間等の取組と合わせ、食に興味を持たせたり、食べる意欲を伸ばしていく。	4			
	(3) 情報を公開し理解・信頼を高める。	◎保護者・学校関係者評価委員の客観的評価による改善 ◎地域貢献活動による、郷土愛の育成	・保護者アンケートによる肯定的評価の割合(年2回) ・学校関係者評価における肯定的評価4段階で3.2以上 ・年に2回のクリーン活動の実施、児童アンケートで「自分から積極的に活動に参加できた」「須波の地域に貢献したいと感じることができた」児童の割合	90 100 95	95 100 93	98 100 94	109% 100% 99%	A A B	・保護者アンケートによる「各通信やホームページなどで、児童の頑張りを学校の様子が分かる」の肯定的評価は、98%であった。また、10月の学校関係者評価における肯定的評価4段階で4の評価をいただいた。 ・今年度2回計画していたクリーン活動だったが、2回目実施日の雨天・雷により中止となったため、1回の実施となった。しかし、環境について学習を進めていた4年生がどうしても実施したいという思いから、別日に須波港までのごみを拾う活動を行った。「地域に貢献したい」と回答した児童が98%、「自分から積極的に参加できた」が90%だった。	・引き続き、児童の頑張りを学習活動の様子がよく分かる通信の発行やHPの更新に取り組んでいく。 ・来年度に向けて、地域貢献活動としての意義を踏まえた上で、児童が積極的に活動でき、持続可能な内容にしていけるよう、児童の意見を取り入れながら考えていく。	4		〇適切に地域との連携を進め、信頼される学校づくりを推進している。 〇本場に素直でかわいい子ども達にいつも癒やされている。 〇地域との関わりも増え、楽しませてもらい、元気をいただいている。 〇保護者、地域との関係をこれまで以上に密にしていく必要があると考える。 〇今後も、チームワークを大切にし、子ども達の指導に当たってください。	
(2) 幼保・小・中連携の充実を図る。	◎幼稚園等・中学校との連携による系統的・組織的な教育の推進	(小中合同授業、授業交流、合同研修、幼保小合同活動等の充実) ・学期に1回以上実施	100	100	100	100%	A	・2学期は、小学校・中学校の教育研究会への自主的な参加、中学校体育教諭による5・6年生への陸上教室の実施、中学校吹奏楽部の演奏動画の紹介等を実施し、小中連携の充実を図った。1月には、幼保小連携担当・養護教諭による宗郷保育所への2回目の見学を行い、幼保小の系統的な接続に向けて、交流を行った。	・児童数の減少やコロナ禍以降の行事等の改善を受け、小中連携の在り方を再構築していく必要があると感じている。小学校と中学校の場所が遠いという課題をICT機器の活用等で改善しながら、実態にあった小中連携を考えていく。 ・幼保小連携の充実のため、次年度入学予定の児童がこの幼稚園・保育所に所属しているかを早期に把握できるような情報を集め、連携を図っていく。	4				
(3) 「働き方改革」の推進を図る。	◎業務改善を図りながら主体的かつ協働的な業務の確実な遂行	・主体的・協働的に業務改善案を考え、行動する教職員の割合 ・月45時間以内の業務遂行 ・年休5日間以上取得者の人数	80 90 100	92 80 54	88 91 81	110% 101% 81%	A A B	・88%の職員が業務改善につながる提案をすることができた。 ・月45時間以内の業務遂行は、91%の達成値で、目標値を達成した。 ・年休取得は、現時点で81%達成している。	・業務の効率化、行事や学習活動、時程の見直し・精選、業務分担の仕方の工夫等、今後も業務改善につながる案を職員みんなで提案し合い、児童と向き合う時間確保につなげる。 ・教職員の健康や安全に互いに注意を払っていく。 ・月45時間以内を意識しながら業務にあたる。 ・春休みを活用して年休取得達成に向けて計画していく。	4				

【j:自己評価 評価】
A:100≦(目標達成) B:80≦(ほぼ達成)<100 C:60≦(もう少し)<80 D:(できていない)<60

【I:学校関係者評価 評価】
イ:自己評価は適正である。ロ:自己評価は適正でない。ハ:分からない。